

市民と警察を

つなぐ広報紙



酒寄 喜治 さん
(鴻巣交番・51歳)

古河警察署鴻巣交番において、毎月広報紙「このすパトロール」が発行されています。パソコンが普及している現在、珍しい手書きの広報紙です。今回は、この手書きの広報紙を毎月発行している酒寄巡査部長にお話を伺いました。

「私が広報紙づくりを始めたのは、下妻警察署飯沼駐在所に配属になったときです。担当の農村地区を巡回する際に、住民とコミュニケーションを図るにはどうしたらよいか考えていたときに、思いついたのが広報紙でした。そのころの広報紙はガリ版と鉄筆で原稿を作り、謄写版で印刷するものでした。」と酒寄さんは当時を懐かしそうに振り返ります。

「千代川村大形駐在所勤務のときは『わが町を知っていますか』というコーナーを設け、村内の歴史についての記事を掲載しました。村民の中には、綴って保存してくれる方もありました。」こ

ぶんがくかん
Vol.75

家康最後の側室・お六の生涯を描く 諸田玲子著『仇花』

もろたれいこ あだばな

「元和八年四月十八日、家康の七回忌の法要が日光山東照宮にて執り行われた。

これに先立ち、お六は古河の鴻巣御所へ入った。古河は江戸より十六里、日光街道沿いにある。古河藩は、永井直勝が新藩主となったばかりで、古河城は……」

2003年10月25日初版第一刷発行、古河が描かれた歴史小説に、また新たな1冊が加わりました。『仇花』と題されたこの小説は、徳川家康の最後の側室で、家康死後、古河公方家へ再嫁したお六の激しくもはかない生涯を描いています。

著者は諸田玲子氏。1954年静岡県生まれ。上智大学文学部英文学卒業後、外資系企業勤務を経て、テレビドラマのノベライズ、翻訳などを手がけます。96年に『眩惑』を発表、作家生活へと入りました。2000年に『幽恋舟』が第13回山本周五郎賞の候補に、2001年、『あくじゃれ瓢六』が第126回直木賞の候補に、また2002年には『源内狂恋』で再び山本周五郎賞(第15回)の候補に挙げられ、そして本年、『其の一日』で第24回吉川英治文学新人賞

を受賞しました。

出合いと別れを繰り返し死んでゆく、哀しくも愛すべき人間を切れ味鋭い文章で描写し、また重厚なものから軽妙な作品まで、その幅広い作風は多くの読者に支持され、歴史小説の新旗手として、今後、最も活躍が期待される女流作家の一人であることはまちがいないでしょう。



諸田玲子氏。鴻巣御所跡地 総合公園内にて撮影・田山達之氏、写真提供・光文社)

ところで、諸田氏は『仇花』の執筆にあたり、古河の地を訪れ、総合公園内の公方館跡などを取材されています。その時の印象を、「古河公方の住居・鴻巣御所の跡地はひっそりと静まり返っていた。御所沼に臨み、鬱蒼とした林に囲まれた一画は、清々しい冷気と湿り気を帯びた土の匂いが渾然一体となって、一歩足を踏み入れただけで鮮烈な妖気に包まれる」と評しています。(『小説宝石』11月号より転載)

これからの季節、日々寒さが増してはきますが、『仇花』を読んでお六の生涯に思いを馳せながら、御所沼周辺を散策してみるのも一興ではないでしょうか。